

新約聖書の中の祈り 第17回

□「新約聖書の中の祈り」のアウトライン

1. イエスの祈り
2. 福音書における他の祈り
3. 使徒の働きにおける祈り
4. 書簡における祈り

□「書簡における祈り」・・・パウロの書簡の中から、23の祈りの事例を見る。本日は、第6から第10の、5つの事例。5つとも、パウロが宛て先の教会の信者たちのために祈った祈りである。祈りの主要な内容を《〇〇》として示す。

6. 《悪に陥ることがないように》 II コリ 13:7 私たちは、あなたがたがどんな悪も行うことのないように、神に祈っています。

(1) 背景

- ① コリントは、ギリシアの町のひとつ。コリントの教会は、パウロの第2次伝道旅行により形成された。
- ② 使 18:11 「パウロは1年6か月の間腰を据えて、彼らの間で神のことばを教え続けた」
- ③ パウロは第3次伝道旅行の中で、コリントの教会に宛てて手紙を書いた。第一の手紙はエペソに滞在中に、第二の手紙はマケドニア、おそらくピリピに滞在中、書かれた。

(2) 「私たち」・・・使徒パウロとテモテ (1:1)

(3) パウロとテモテがコリントの教会のために祈っている

- (4) 祈りの内容・・・コリントの教会の信者たちが、悪い行いの中に落ち込むことのないように。具体的には次のようなことがコリントで起きたので、パウロは第一の手紙を書いた。

- ① 淫らな行い・・・I コリ 5:1、11
- ② 信者間の争いを教会で扱わないで、法廷に持ち込む・・・6:1
- ③ 分派争い・・・3:3~4、11:18
- ④ 教会での無秩序な異言の祈りによる混乱・・・14:23、27~28、33
- ⑤ 死者の復活はないと言う・・・15:12

7. 《霊的成長を願う》 エペソ 1:16 祈るときには、あなたがたのことを思い、絶えず感謝しています。

(1) 背景

- ① エペソは、小アジア（現在のトルコ）の西側にあった町。エペソの教会は、パウロの第3次伝道旅行により形成された。
- ② 使 19:8~20 エペソにおける伝道活動は、2年を超えた。
- ③ パウロは、第3次伝道旅行の後、アンティオキアに帰還することなく、エルサレムに来たところで捕らえられた。
- ④ その後、パウロはカイサリアに移送されて2年間収監された。さらにローマに移送されて、そこでまた2年間収監された。
- ⑤ エペソ 6:20 「私はこの福音のために、鎖につながれながらも使節の務めを果たしています。」・・・ローマでの収監中に、この手紙が書かれた
 - 使 28:16 「ローマに入ったとき、パウロは、監視の兵士が付いてはいたが、一人で生活することを許された。」
 - 使 28:30 「パウロは、まる2年間、自費で借りた家に住み、訪ねて来る人たちをみな迎えて、少しもはばかりことなく、また妨げられることもなく、神の国を宣べ伝え、主イエス・キリストのことを教えた」

(2) 祈りの経緯 1:15・・・「私も、主イエスに対するあなたがたの信仰と、すべての聖徒に対する愛を聞いているので」

- ① エペソの教会の信者たちは、イエスをメシアであると証言していた。そして、「すべての聖徒」、特にユダヤ人信者たちに対して愛を抱いていた。
- ② パウロは、このことを伝え聞いて、感謝の祈りをささげている。

(3) 「祈るときには」・・・直訳「祈り（複数形）において」→パウロは、一回だけでなく、しばしば祈っていた

(4) 祈りの宛先 1:17・・・父なる神である

(5) 祈りの内容 1:17~23

- ① 17節 「神を知るための知恵と啓示の御霊を、あなたがたに与えてくださいますように」・・・聖書の啓示は、聖霊によって、預言者や使徒たちに与えられた（Ⅱペテ 1:21、Ⅱテモ 3:16、Ⅰペテ 1:10~12）。その聖書を読み、理解するためには、聖霊の助けが必要である。信者たちが聖書を理解し、神を知ることができるのは、聖霊の働きである。
 - 【補足】Ⅰペテロ 1:11の「キリストの御霊」、1:12の「天から遣わされた聖霊」、いずれも神の第三位格である神の霊、聖霊を指す。キリストが聖霊を遣わし（ヨハネ 16:7）、聖霊はキリストの栄光を現わす（ヨハネ 16:14）ので、ペテロは聖霊を「キリストの御霊」と表現した。

- ② 18～19節 「またあなたがたの心の目がはっきり見えるようになって、(中略)、○○を知ることができますように。」・・・信者たちの霊的な目が開かれて、霊的な知識を得ることができますように。それは言葉を変えると、神の計画を理解し、自分たちの将来に何が起きるのかを、もっとよく知るようになる、ということ。これは、「霊的に成長する」ことの一面である。
- ③ 「○○」の部分は、霊的な知識の内容である。18～23節の中で、5つの項目が挙げられている。

(6) 霊的な知識の内容

- ① 18節 「神の召しにより与えられる望みが、どのようなものか」という知識
- ② 18節 「聖徒たちが受け継ぐものが、どれほど栄光に富んだものか」という知識
- ③ 19節 「私たち信じる者に働く神のすぐれた力が、どれほど偉大なものであるか」という知識
- ④ 20～21節 「キリストの復活と昇天、キリストの現在の地位」といった事柄に関する知識
- ⑤ 22～23節 「からだの奥義」、「内住のメシアの奥義」といった事柄に関する知識

8. 《霊的成長と神を知ることがを願う》 エペソ 3:14～15 こういうわけで、私は膝をかがめて、天と地にあるすべての家族の、「**家族**ギパトリア」という名の元である**御父**ギパテラの前に祈ります。

(1) 直前の文脈の確認 エペソ 2:11～3:13 「からだの奥義」(3:6)について語る。

- ① 異邦人はかつて、神の祝福の外側に置かれていたが、キリスト・イエスにあって、ユダヤ人と共に、共同の相続人になり、**共同の体**に属するものとなり、神の約束の共同の受取人になる。
- ② **共同の体**とは、ユダヤ人信者と異邦人信者がともに一つのからだに属すること、そのからだとは、目に見えない普遍的な教会である。教会のかしら(頭)は、キリストであり、信者たちはそのからだである。
- ③ 異邦人が救われることは、旧約聖書でも預言されており、奥義ではない。異邦人信者がユダヤ人信者と共に、一つのからだに属すること、そしてそのからだとは、キリスト(メシア)のからだであるということは、新約聖書において初めて明らかにされた。
 - 旧約聖書では知られていなかったことが、新約聖書で明らかにされたこと、それが奥義である。

(2) 神は、ユダヤ人だけの神ではない。ユダヤ人信者も異邦人信者も共にひとつのからだに連なり、キリスト・イエスにあって、ともに「私たちの父よ」と神に呼びかけることができる。このことの基盤の上に、パウロは、3:14~15で祈る。

① 祈りの姿勢・・・膝をかがめて→パウロはひざまずいて祈っている

② 祈りの宛て先・・・父なる神

(3) 祈りの内容 エペソ 3:16~19 原文を語順に即して直訳すると・・・

① 父なる神があなたがたに与えてくださいますように

② (その手段は)

- 父の栄光の豊かさに応じて

- (神の) 力によって

③ (何を与えてくださるのか、5つ)

- あなたがたが強くされますように、神の霊を通して、内なる人において

- キリストを住まわせてくださいますように、信仰を通して、あなたがたの心の中に

- 愛に根差され、愛を土台とされて、あなたがたが強められますように、そしてすべての聖徒たちと共に、しっかりと握ることができますように

- (何を握るのか) 広さ、長さ、高さ、深さがどれほどであるか

- (何について)・・・書かれていないが、神の真理

- そして、グノーシス(知識・科学)をはるかに超えたキリストの愛を知るに至るように

- あなたがたが、神の満ち満ちたものすべてによって、満たされますように(参照 コロ 2:9~10「キリストのうちにこそ、神の満ち満ちたご性質が形をとって宿っています。あなたがたは、キリストにあって満たされているのです。」)

9. 《宣教活動を支援する信者との交わり》 ピリピ 1:4~5 私は、あなたがたのことを思うたびに、私の神に感謝しています。あなたがたすべてのために祈るたびに、いつも喜びをもって祈り、あなたがたが最初の日から今日まで、福音を伝えることにともに携わってきたことを感謝しています。

(1) ピリピ 4:15~16 ピリピの教会は、パウロの宣教活動を経済的にサポートした。

(2) 宣教活動をサポートすることは、1:5にあるように、「福音を伝えることにともに携わる」ことである。

(3) パウロは、ピリピの教会の信者たちのために、いつも感謝と喜びをもって祈った。

(4) 祈りの内容は、文脈上、次のように推察される

① パウロと信者たちの間の交わりが保たれますように

② 福音宣教が前進しますように

10. 《神の栄光が現わされますように》 ピリピ 1:9~11・・・9番の祈り（ピリピ 1:4~5）に続く祈りであるが、祈りの内容は別のものである。内容は二つ。

(1) 第一の祈り ピリピ 1:9~10a 私はこう祈っています。あなたがたの愛が、知識とあらゆる識別力によって、いよいよ豊かになり、あなたがたが、大切なことを見分けることができますように。

① 第一の祈りでは、焦点は、「あなたがたの愛」にあてられている。二重下線部である。「信者たちの愛がますます豊かになるように」という祈りである。

② 日本語訳では、「知識とあらゆる識別力によって」とあるが、原文では「完全な知識とすべての識別力にあって」である。

③ 【補足】「完全な知識とすべての識別力」とは、人が持つことのできるものではない。信者のうちに住んでおられるキリストを指すものと考えられる。

- I コリ 1:24 「神の力、神の知恵であるキリスト」
- I コリ 1:30 「キリストは私たちにとって神からの知恵」
- コロ 2:3 「このキリストのうちに、知恵と知識の宝がすべて隠されています」・・・「このキリスト」とは、コロ 1:27 の内住のメシアを指す。

④ 愛が豊かになって、大切なことを見分けることができる

(2) 第二の祈り ピリピ 1:10b~11 こうしてあなたがたが、キリストの日に備えて、純真で非難されることのない者となり、イエス・キリストによって与えられる義の実に満たされて、神の栄光と誉れが現わされますように。

① 第二の祈りの内容は、二重下線部にあるように、「あなたがたが、純真で非難されることのない者となりますように」という祈りである。そしてゴールは、神の栄光である。

② 【補足】そのための時間的順序は、原文では次のとおり。

- まず、イエス・キリストによって与えられる義の実に満たされる。
- そうすると、キリストの日に備えて、純真で非難されることのない者となる。
- そのことは、神の栄光に至る。

③ 義の実は、人が自分の行いで得るものではない。イエス・キリストから与えられるものである。それを与えられて、信者は純真で非難されることのない者となるのである。よって、これは人の行いによるものではなく、神のみわざである。ゆえに、その人が称賛されるのではなく、神の栄光となり、神がほめたたえられるに至る。

④ 【補足】「非難される」について

- 信者を非難するのは、サタンである。サタンは日々、昼も夜も、私たち信者を神の御前で訴えている（黙 12:10）。
- しかし、そこには、私たちの大祭司であるキリストがおられ、私たち信

者を弁護してくださっている（ヘブル 4：14～16、7：25、ロマ 8：34、Iテモ 2：5）。

- 私たち信者がなすべきことは、罪を犯したことに気づいたら、それを神の前に言い表すことである。そうすると、気づいていない罪も含めて、すべての不義からきよめられる（Iヨハネ 1：9）。その時点で、サタンはその信者を訴える根拠を失う。

- ⑤ 「キリストの日」とは、キリストの再臨のときを指す。特にイエス・キリストが教会の信者たちを迎えに来る**携挙**のときを指す。よく似た用語に「主の日」がある。こちらは大患難期を指すので、混同しないように注意。

□【参考資料】「キリストの日」

1. ピリピ人への手紙には、「キリストの日」という表現が3回出てくる。これは、キリストの再臨、特にイエス・キリストが教会の信者たちを迎えに来る**携挙**のときを指す。
 - (1) ピリピ 1：5～6 あなたがたが最初の日から今日まで、福音を伝えることにともに携わってきたことを感謝しています。あなたがたの間で良い働きを始められた方は、キリスト・イエスの日が来るまでにそれを完成させてくださると、私は確信しています。
 - (2) ピリピ 1：9～10 私はこう祈っています。あなたがたの愛が、知識とあらゆる識別力によって、いよいよ豊かになり、あなたがたが大切なことを見分けることができますように。こうしてあなたがたが、キリストの日に備えて、純真で非難されるところのない者となり、イエス・キリストによって与えられる義の実に満たされて、神の栄光と誉れが現わされますように。
 - (3) ピリピ 2：14 神はみこころのままに、あなたがたのうちに働いて志を立てさせ、事を行わせてくださるお方です。すべてのことを、不平を言わずに、疑わずに行いなさい。それは、あなたがたが、非難されるところのない純真な者となり、また、曲がった邪悪な世代のただ中であって傷のない神の子どもとなり、いのちのことばをしっかりと握り、彼らの間で世の光として輝くためです。そうすれば、私は自分が努力したことが無駄ではなく、労苦したことも無駄ではなかったことを、キリストの日に誇ることができます。
2. キリストの再臨は、2回に分けて起きる。1回目は教会の信者たちのため、2回目はイスラエル民族のためである。
3. 再臨1回目・・・教会の信者たちを天に迎えるために
 - (1) 十字架にかかる前の夜に、イエスはそのことを弟子たちに約束した。
ヨハネ 14：3 わたしが行って、あなたがたに場所を用意したら、また来て、あなたがたをわたしのもとに迎えます。わたしがいるところに、あなたがたもいるようにするためです。

- (2) 携挙は、主の日（大患難期）の前に起きる
- ① Iテサ 1:10 御子が天から来られるのを待ち望むようになったかを、知らせているのです。この御子こそ、神が死者の中からよみがえらせた方、やがて来る御怒りから私たちを救い出してくださいるイエスです。
 - ② Iテサ 5:1~5 兄弟たち。その（携挙の）時と時期については、あなたがたに書き送る必要はありません。主の日（大患難期）は、盗人が夜やって来るように来ることを、あなたがた自身よく知っているからです。人々が「平和だ、安全だ」と言っているとき、妊婦に産みの苦しみが望むように、突然の破滅が彼らを襲います。それを逃れることは決してできません。しかし、兄弟たち、あなたがたは暗やみの中にいないので、その日が盗人のようにあなたがたを襲うことはありません。あなたがたはみな、光の子ども、昼の子どものものです。私たちは夜の者、闇の者ではありません。
- (3) キリストにある死者たちを連れて来られる
- ① Iテサ 5:13~17
 - ② 15節 「主の来臨」、ここでは文脈上、再臨の1回目である。
 - ③ 13節「眠っている人たち」とは、肉体の死を経て、霊魂がパラダイス（義人の霊魂が行く先）に移されている人々を指す。肉体は活動していないが、霊魂は意識をもって活動している状態を、「眠っている」と表現する。聖書では、信者にしか使わない表現である（用例 ヨハネ 11:11）。
 - ④ 14節「イエスにあつて眠った人々」、原文は「イエスによって眠った人々」である。教会の信者たちの死の時を決めるのは、イエスである。それを「イエスによって眠った」と表現する。
 - 十字架以前は、サタンがすべての人の死の時を決めていた。
 - イエスはご自分の死によってサタンに打ち勝ったので、信者の死の時については、サタンの支配からイエスの支配へと移った。（ヘブル 2:14~15、コロ 1:13）。
 - ⑤ 眠っているたちは、16節「キリストにある死者」とも呼ばれる。「キリストにある」とは、新約時代の教会の信者であることを指す用語である。
 - ⑥ 14節、携挙のときには、イエスは「イエスによって眠った人々」の霊魂を天のパラダイスから連れ出し、地上へ下らせる。そして16節、彼らは地上で復活の体を得る。
 - ⑦ 17節、イエスは、地上には降り立たずに空中にとどまっています、彼らを地上から引き上げ、天に連れて帰る。こうして、いつまでも主とともにいることになる。
- (4) 携挙のときに地上で生き残っている信者たちは、肉体の死を経ることなく、復活の体に変換されて、天に引き上げられる。

- ① I コリ 15 : 51~52 聞きなさい。私はあなたがたに奥義を告げましょう。私たちは皆眠るわけではありませんが、みな変えられます。終わりのラッパとともに、たちまち、一瞬のうちに変えられます。ラッパが鳴ると、死者は朽ちないものによみがえり、私たちは変えられるのです。
- ② I テサ 4:16~17 号令と御使いのかしらの声と神のラッパの響きとともに、主ご自身が天から下って来られます。そしてまず、キリストにある死者がよみがえり、それから、生き残っている私たちが、彼らと一緒に雲に包まれて引き上げられ、空中で主と会うのです。こうして私たちは、いつまでも主とともにいることとなります。
- (5) 携挙は、いつでも起こり得る。その時は、父なる神のみが知る。条件はただひとつ、教会の信者として救われるべき異邦人信者の数が満ちた時である。
- ① 黙 22 : 20 これらのことを証しする方が言われる。「しかり、わたしはすぐ来る。」アーメン。主イエスよ、来てください。
- ② マタイ 24 : 36~42 ただし（ところで）、その日、その時がいつなのかは、だれも知りません。ただ、父だけが知っておられます。人の子の到来はノアの日と同じように実現するのです。洪水前の日々にはノアが箱舟に入るその日まで、人々は食べたり飲んだり、めとったり嫁いだりしていました。洪水が来て、すべての人をさげすんでしまうまで、彼らには分かりませんでした。人の子の到来もそのように実現するのです。そのとき、男が二人畑にいて一人は取られ、一人は残されます。女が二人臼をひいていると一人は取られ、一人は残されます。ですから、目を覚ましていなさい。あなたがたの主が来られるのがいつの日なのか、あなたがたは知らないのですから。
- ③ ロマ 11 : 25 イエスラル人の一部が頑なになったのは異邦人の満ちる時が来るまでであり、
- (6) 携挙のあとに続くこと
- ① 携挙は、結婚の段階でいうと、花婿であるキリストが花嫁である教会を迎えに来ることにあたる。
- 父親が花嫁を選び花嫁料を支払う→息子は花嫁のために住まいを準備する→準備ができたなら花嫁を迎えに行く
- ② このあと、婚礼前のきよめ、婚礼の式、そして婚宴（披露宴）と続く。
- ③ きよめは、「キリストの裁きの座」（I コリ 3 : 11~15、II コリ 4 : 10）である。天上で行われる。このきよめにより、「花嫁は用意ができた。花嫁は、輝くきよい亜麻布をまとうことが許された」（黙 19 : 7~8）となる。
- ④ 婚姻の式は、黙示録 19 : 7 によると、天上で行われる。
- ⑤ そして、婚宴は、地上に再臨ののち、メシアの王国の建国時に行われる（黙 19 : 9、イザ 25 : 6）。